

「うそ」に対する子どもの認識に関する研究の動向

筑波大学大学院（博）心理学研究科 楯 誠

筑波大学心理学系 新井邦二郎

Children's awareness of lying: A review

Makoto Tate and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper reviews research into children's awareness of lies. Although this topic was neglected for nearly half a century, following Piaget's studies (1932), it has recently been the focus of renewed attention. In this paper, we first describe early research into children's awareness of lying within Piaget's series of studies concerning moral judgments. We then discuss recent studies looking at children's moral judgments and their categorization of lies. Next, we consider some other aspects of children's awareness of lying, before, finally, discussing issues for future research.

Key words: children, lying, moral judgment, categorization

本稿は、「うそ」に対する子どもの認識について検討した研究を概観するものである。子どもの「うそ」について心理学が関心を持ち始めた時期は非常に早く、Hall (1891) や Stern & Stern (1909, Lamiell による英訳, 1999) の頃から注目されてきた。Piaget (1932 大伴訳, 1957) は道徳判断の発達に関する一連の研究のなかで「うそ」を扱っており、「うそ」に対する子どもの認識について初めて詳細な検討を行っている。しかしながら、子どもの「うそ」の認識についての研究は、Piaget (1932) の研究以降ほぼ半世紀にわたって中心的議題として取り上げられることが無かった。再びこの議題が心理学において注目されるようになったのは80年代に入ってからであり、ここ20年においていくつかの新たな知見が得られるようになってきた。近年において「うそ」に対する子どもの認識に関心が向けられるようになった理由として Talwar & Lee (2002) は、理論的なものと実際的なものの大きく2つを挙げている。理論的なものとしては、道徳発達の文化普遍性の検討に代表されるような子どもの道徳性研究の進歩や、心の理論研究に代表されるような子どもの心的状態の理解に関する研究の発展が指摘され

ている。また、より実際的なものとしては、児童虐待など子どもに関わる犯罪の増加に伴い、子どもの法的証言能力への関心（真実を発言できるか否か）の高まりが挙げられている。

心理学において子どもの「うそ」について取り扱っている研究は、社会心理学における虚偽検出や非言語的漏洩の領域、あるいは近年注目を集めている自白や法廷証言の正確さなどを扱う法心理学の中にも見られるが、本稿では Piaget (1932) 以降伝統的に発達心理学の領域で行われている子どもの「うそ」の認識研究について概観していく。

本稿の構成としては、最初に Piaget (1932) による子どもの「うそ」の認識についての研究を解説する。次に「うそ」の認識としてよく研究がされている、「うそ」に対する道徳判断と定義判断についての知見をそれぞれまとめる。また、この2つの判断以外に研究されている「うそ」に対する認識の側面についていくつか記述し、最後にこれらの研究の問題点と今後の課題を述べようと思う。

1. Piaget における子どもの「うそ」の認識

「うそ」に対する子どもの認識についてアプローチした先駆的研究は、Piaget (1932) によるものである。彼は、子どもの道徳判断の発達についての一連の研究の中で「うそ」を取り上げ、子どもが「うそ」をどのように捉えているかについて、その特徴を報告している。Piaget (1932) が検討したものは大きく分けると、1) 「うそ」の定義判断（どのような発言（叙述）が「うそ」か）と2) 「うそ」の道徳判断（どのような事実と異なる誤った叙述がより悪い叙述か—「うそ」と誇張表現や空想といったその他の誤った叙述との比較）の2種類である。以下に Piaget (1932) の報告を概観する。

1) 子どもの「うそ」の定義判断

Piaget (1932) は、子ども達に「「うそ」とはなにか？」と直接的に質問し、あるいはエピソードを提示して「うそ」か否かを尋ね、その反応から「うそ」の定義判断、カテゴリー化の発達を3つの段階に分類した。定義の最初の段階（第1型）は「「うそ」とは悪い言葉である」というものである。一般的に考えられている「うそ」だけでなく、口にすることを禁じられている悪口や汚い言葉なども「うそ」と判断する。この段階の子どもは、「うそ」とは言語によって犯される道徳的過失であると認識している。つまり、言葉を用いて他者を騙すという道徳的過失と、言っては行けないと禁止されている言葉を言ってしまう道徳的過失は同等のものに見なしてしまう傾向を持つと Piaget (1932) は主張している。次の段階の認識（第2型）は「「うそ」とは本当でないことを言うこと」である。この段階の子ども達は、叙述の内容が事実と異なっている場合にその叙述を「うそ」と認識する。そのため、その叙述の誤りが他者を騙そうしている意図的なものであろうと、単なる間違いの結果であろうと、同等に「うそ」と認識してしまう。Piaget (1932) はこの段階の子ども達は、意図的行為と無意図的な行為を区別することは可能であるが、その区別を「うそ」の定義に上手く関連づけられないとしている。そして最後の段階（第3型）において、話し手の意図を定義に関連づけ、「「うそ」とは意図的な言語的誤り」とする判断が可能になるとしている。Piaget (1932) のデータでは、第1型の認識が6歳くらいまで、第2型が8、9歳くらい、第3型の認識に至るようになるのは10歳以上になってからであることが示されている。

2) 子どもの「うそ」の道徳判断

Piaget (1932) はどのような事実と異なる誤った

叙述がより道徳的過失として重いのかについて、主に2種類のエピソードを対提示する形式で「どちらの（主人公の）言ったことがより悪いか？」と尋ね、子ども達に報告をさせた。ここでは、「うそ」を始めとする誤った叙述の内容および結果と道徳判断の関係が検討された。誤った叙述の内容と道徳判断については、具体的には明らかに相手を騙そうとする意図を持った「うそ」（例えば本当は貰っていないのに先生から良い点を貰ったと言う）と、誇張表現（牛くらい大きいイヌを見たと言う）や、願望から作り上げた寓話・空想（自動車に本当には乗っていないが、乗せてもらったと作り話をする）は、どちらがより悪い叙述なのかを子ども達に尋ねた。その結果、子ども達は発達の初期の段階において意図は考慮に入れず、誤った叙述の中にどれだけ真実らしさが多いか少ないかによって判断していた。すなわち、叙述が真実らしくなくなるほど、その内容が現実から離れるほどより悪いと子ども達は判断すると Piaget (1932) は指摘している。この段階においては、「先生から良い点を貰った」という意図的に他者を騙す「うそ」の叙述よりも、「牛くらい大きいイヌを見た」という誇張表現の叙述の方が悪いという判断がされていた。そして、子ども達はこの判断の理由として多くが、誇張表現や願望から作り上げた寓話は「うそ」の叙述よりもそれがすぐ事実と異なることが判るため、客観的に「信じることができない」から悪いと報告していた。大体このような判断は7歳ぐらいがピークであり、その後10歳前後までに相手を騙そうとする意図を持った叙述をより悪いと判断するようになることが明らかにされた。また、叙述内容についての評価の仕方も変化し、叙述が真実らしくなく過ちとすぐ分かるのであれば、それは「うそ」をつこうとしているのではなく、誇張や冗談であると判断されるようになり、逆に「先生から良い点を貰った」というような「うそ」の叙述は、信じられてしまう可能性があるため、より悪いと判断するようになると指摘されている。

誤った叙述のもたらす結果と道徳判断については、内容と同様に2種類のエピソードを対提示する形式で調べられている。具体的には騙す意図を持たないが誤った情報を教えてしまい、相手に損害を与えるエピソードと、相手を騙そうとして誤った情報を教えたが（「うそ」）、相手に損害を与えなかったエピソードを用い、どちらがより悪いかを判断させた。その結果、7歳くらいまでの子どもは物理的結果（相手が損害を負ったか、負わなかったか）を基準に判断するが、それ以降は加齢とともに意図をよ

り重視した判断をすることが可能になることが明らかにされた。

また Piaget (1932) は、なぜ「うそ」はついては悪いのかという理由についての子どもの回答も集めており、その理由付けは3つの段階に分けられるとしている。最初に現れる主な理由は「罰せられるから、「うそ」はついてはいけない」というものである。この段階の子どもにとっては罰せられることがすなわち悪いことになる。逆にいえば大人に罰せられなければ悪くないと判断するのである。それがあ程度の発達を経ると「うそ」とは本質的に悪いものであり、懲罰の対象になる」という考えを持つようになり、例え直接的に罰せられなくとも「うそ」をつくことは悪いと評価するようになる。そして10歳を越えたあたりで「相互の信頼と情愛に反するため「うそ」は悪い」という理解に至るとしている。

Piaget (1932) の道徳判断研究は、結果判断から意図判断 (山岸, 1991) への移行、あるいは結果論から動機論 (吉岡, 1992) という言葉でよく表わされる。特に幼児や児童前期の子どもの他律的、結果論的な道徳判断は道徳的实在論 (moral realism) という言葉でも表わされ、以後の研究の中心的議題の1つとなった。Piaget (1932) の事例は、「うそ」という道徳的過失についても結果論から動機論といった記述をほぼ支持しており、Piaget (1932) は盗みや過失等といった他の道徳的問題と同様に、「うそ」の定義判断や道徳判断は客観的な結果や大人からの評価といった外的基準からの判断から、行為者の意図といった内的な基準による判断に発達とともに変化することを主張している。

2. 「うそ」に対する子どもの道徳判断

子どもの「うそ」の認識についての研究は、Piaget (1932) の影響を多大に受け、その研究領域を「うそ」の道徳判断と定義判断に焦点化してきたと言える。そこで本稿においても、Burton & Strichartz (1991) や Lee (2000) の文献研究にならい、道徳判断、定義判断毎にそれぞれの研究の解説を行う。定義判断に比べ、道徳判断は時期的に早い段階から検討が行われていることから、本稿では道徳判断、定義判断の順に記述する。本節においては子どもの「うそ」の道徳判断についての Piaget (1932) 以降の研究を概観する。

1) Piaget の再検討

Piaget (1932) 以降の「うそ」の道徳判断研究は、言わば彼の主張の詳細な再検討および修正であ

ると言える。Piaget (1932) の道徳発達理論はいくつかの問題点 (例えば、結果論と動機論は対立する道徳観であり、一方が変形して、もう一方に統合されるという Piaget 本人が主張する発達段階の条件を満たしていない点や、道徳判断における社会的認知の関与を十分に検討していない点など) を抱えており、以降の子どもの道徳発達研究においてはこれらをどのように解決するかという形で発展してきた (山岸, 1991)。「うそ」の道徳判断もその一部としていくつかの検討がなされている。例えば、Mackenzie (1971) は反社会的な行動の種類 (「うそ」、盗み、攻撃など) が子どもの道徳判断にどのような影響を与えるか検討し、「うそ」という行動は他の行動に比べてより早く結果論から動機論による道徳判断へと変化が見られることが明らかにした。また二宮 (1981) は、Gutkin (1972) の研究を元にエピソード構造をシステムティックに変化させ、「うそ」、盗み、過失の道徳的領域における意図と物理的結果の組み合わせの影響を検討した。その結果、「うそ」を始めとする全ての道徳的領域において Gutkin (1971) の主張するような、結果のみの判断段階から、意図と結果の両方を考慮するが結果を重視する判断段階、意図のほうをより重視する段階、そして意図のみで判断する段階という4つの細かな段階が結果論から動機論への推移の過程に存在することを明らかにした。また Piaget (1932) の理論を元に新しい道徳性の発達理論を確立した Kohlberg (1971, 1984 内藤, 1992より引用) の主張を基盤にして「うそ」の道徳判断について検討した研究も存在する (Carson, 1984; Piesach & Hardeman, 1983)。しかしながら、これらの研究において共通するのは、「うそ」は Piaget (1932) や Kohlberg (1971, 1984) の道徳発達理論の領域普遍性を証明する材料としての1領域としてしか捉えられておらず、「うそ」という事象を問題の中心に据えた研究ではなかった。

子どもの「うそ」の道徳判断を研究の中核に据えた研究が現れるようになったのは Piaget (1932) 以降50年が経過した1980年代になってからである (Lee, 2000)。Peterson, Peterson & Seeto (1983) は Piaget (1932) の研究方法の問題点を指摘し、それを修正する形で追試研究を行った。彼らは Piaget (1932) の用いた2つのエピソードの対提示による質的評価 (どちらが悪いという判断) は子どもの認知能力に大きな負担をかけると指摘し、1つのエピソードに対して量的な評価 (どのくらい悪いという判断) をさせるという測定方法の変更を行った。また、単純に口頭でのエピソードの教示だけで

なく補助刺激としてビデオ映像によるエピソード提示という子ども達がよりエピソードを理解しやすくするための工夫を凝らした。課題エピソードとして Piaget (1932) が扱った3つの無意図的な叙述の誤り(誇張, 年齢推測-年齢を間違える, 方向推測-間違った道を教える)と汚言, 結果の異なる3つの意図的な「うそ」(結果記述無し, 信じてもらえず罰せられた, 信じてもらえて罰せられなかった), 及び利己的な目的で無い3種類のタイプの「うそ」(儀礼的な「うそ」, ジョーク的な「うそ」, 愛他的な「うそ」)の計10種類を設定し, 幼児, 児童および大学生を対象に道德判断をさせた。すると Piaget (1932) の報告とは異なる結果がいくつか見られ, Piaget の主張する年齢(8歳以降)よりも早期の段階において意図に基づく道德判断がなされていることが明らかになった。例えば Piaget (1932) の研究においては年少児は誇張を意図的な「うそ」よりもより悪いと評価することを指摘したが, Peterson ら(1983)の結果においては5歳児においても3つの意図的な「うそ」の方が誇張よりもより悪いと評価していることが示された。さらに, 5歳児においても大人に罰せられた「うそ」よりも信じられた「うそ」の方をより悪いと判断し, Piaget (1983) の指摘とは対照的な結果が得られた。また, 全ての年齢群において自分の身を守るためについた「うそ」の方が相手に気を使ったり, かばったりする目的で行われた「うそ」よりもより悪いと判断しており, 意図的な「うそ」であってもその種類によって評価の仕方が異なることを明らかにした。

Bussey (1992) は, 先行研究において扱っているのは事実と異なった誤った叙述がほとんどであり, その対となる正しい叙述について子ども達がどのように評価しているのかは扱って来っていないことを指摘した。また, 先行研究では「うそ」の信用性(「うそ」が信じられたか否か)や「うそ」の処罰の有無(「うそ」について罰せられたか否か)が道德判断に与える影響について検討しているが, この2つの要素を明確に分けずに混同した形で研究をしている点を挙げ, これらの問題点を検証する研究を行った。具体的には Bussey (1992) はある悪事(misdeed)を隠すために「うそ」をつく, あるいは隠さず正直に告げるというエピソード課題を作り, 「うそ」の叙述と真実の叙述に対する道德判断を直接的に比較できるように設定した。また叙述が信じられたか否か, その結果, 罰せられたか否かについてエピソードを統制し, 幼児及び児童に道德判断をさせた。すると, 「うそ」の叙述及び真実の叙述については全ての年齢において「うそ」の方をよ

り悪いと評価しており, 幼児期においても「うそ」と真実を明確に理解した道德判断がなされていることが明らかになった。また, 「うそ」及び真実を告げたことで罰せられたか否かが道德判断に与える影響を検討したところ, 幼児においては罰せられたか否かは道德判断の評価に影響をもたらす要因になるが, 児童においてはそれが見られないことが示され, Piaget (1932) の主張を支持する結果が見られた。しかしながら「うそ」の叙述を信じたか否かの要因が子どもの道德判断に与える影響は見られず, Piaget (1932) の報告とは一致しなかった。Bussey (1992) は, 幼児は「うそ」は「信じられない」から悪いと判断しているのではなく, 「信じられない」結果, 大人に罰せられるから悪いと判断しているのではないかと考察している。

Wimmer, Gruber & Perner (1984) は, Piaget (1932) の研究において用いられている無意図的な誤った叙述の事例は, 話し手の意図が明示化されておらず, そのために年少の子ども達は意図ではなく客観的結果によって叙述の善悪を判断しているのではないかと指摘した。彼らは心の理論研究において代表的な課題となっている「予期せぬ移動課題」(Wimmer & Perner, 1983)をベースに, 事実と異なる情報を誤って信じており, それを正しく伝えようとして誤った叙述をしてしまうエピソードや, 逆に相手を騙そうとして事実と一致する正しい叙述をしてしまうというエピソードを設定した。また, それぞれのエピソードにおいて話し手の意図を明示化し, 主に幼児を対象に道德判断をさせた。その結果, 4歳半の幼児でさえも話し手の意図から道德判断を行っており, 例え最終的に正しく相手にプラスの結果を与えたとしても, その叙述が相手を騙すためになされたものならばより悪いと判断することが明らかになった。これは Piaget (1932) の主張よりも早い段階において子どもは物理的結果よりも意図を重視した道德判断をしていることを示している。

2) 「うそ」のタイプ, 社会的文脈への関心

80年代以降の「うそ」の道德判断研究は, Piaget (1932) の追試的要素が強いところから叙述の意図性, 叙述の内容や結果といった, どちらかと言えば認知的要因がどう道德判断に影響を与えるのかと言った点に注目しており, その「うそ」が生じた場面, 状況についてはあまり重視されていなかった。しかしながら最近になって特定場面において使われる「うそ」の評価や文化的要因が「うそ」の道德判断に与える影響について着目した研究が見られるようになった。

例えば Walper & Valtin (1992) は儀礼的な「う

そ」(白い「うそ」, white lie)に焦点を絞り、児童を対象に研究を行っている。儀礼的な「うそ」とは、本当は好きではないプレゼントを貰ったときに贈り手に気を使ってプレゼントを「気に入った」と言うように、相手の感情を傷つけないように配慮して発言される「うそ」である。Walper & Valtin (1992)は失敗したケーキを美味しいと「うそ」をつく、及び悪趣味なセーターを趣味がいいと「うそ」をつくという2つのエピソードを設定し、それぞれについて異なる状況要因を組み込み、それらが儀礼的な「うそ」に対する道徳判断にどのような影響をもたらすかを検討した。儀礼的な「うそ」の対象の社会的地位(大人か子どもか)や社会的距離・親密さ(家族か他人か)といった対人関係の要因や、儀礼的な「うそ」をつかねばならない原因となるネガティブな事象(この研究では悪趣味なセーター)が、「うそ」の対象にとって統制可能か否か(個人の好みなのか、経済状況のためやむを得ずか)が状況要因として設定された。

これらの要因と児童の発達差について調査が行われたところ、社会的距離が儀礼的な「うそ」の道徳判断に影響していることが示され、社会的距離のある(あまり親密でない)人に対する儀礼的な「うそ」の叙述はよりポジティブに子ども達に判断されていることが示された。また、統制可能性は社会的距離との間に相互作用があり、統制可能性が低い条件においては、友人への儀礼的な「うそ」は、あまり知らない人へのものよりポジティブに評価され、逆に統制可能性が高い条件においては、友人でない人への儀礼的な「うそ」がより良いと判断されていた。年齢による判断の差異も明らかにされ、児童後期の子どもはそれ以前の子どもに比べてより儀礼的な「うそ」をより良いと評価していた。

またBussey (1999)は悪事を隠蔽する反社会的な「うそ」、前述した儀礼的な「うそ」、おどけたジョーク的な「うそ」の3つの異なるタイプの「うそ」(および同じ文脈における真実の叙述)についての道徳判断の比較を行っている。「うそ」と真実の比較においてはBussey (1992)と同様にどのような文脈においても子ども達は真実に比べて明らかに「うそ」を悪いと判断していた。「うそ」のタイプ間の比較では、子ども達は反社会的な「うそ」を一番悪いと判断しており、次いでジョーク的な「うそ」で、儀礼的な「うそ」はもっとも悪くないと評価していた。また、真実のタイプ間の比較では悪事を正直に告白すること、ジョークを交えずまじめに話すことは良いことであると判断されたが、対人場面で儀礼や丁寧さを考慮せずに思ったことを正直に

告げることはよりネガティブに評価された。この「うそ」と真実のタイプの道徳判断は発達による差異は見られず、4歳児においても「うそ」のタイプによって道徳的評価を変化させていることが明らかになった。

「うそ」のタイプによる道徳判断の違いを検討する研究がある一方で、「うそ」を評価する子ども達が所属する文化が、道徳判断に影響を与えていることを明らかにした研究も存在する。Leeら(Fu, Lee, Cameron & Xu, 2001; Lee, Cameron, Xu, Fu & Board, 1997; Lee, Xu, Fu, Cameron & Chen, 2001)は一連の研究で、中国とカナダにすむ人々の「うそ」に対する道徳判断を研究している。彼らは主人公が自分の行った反社会的な行為および向社会的な行為を隠すために「うそ」をつく(あるいは真実を告げる)といったエピソードを設定し、中国とカナダの子ども達や成人を対象に道徳判断をさせた。すると向社会的行動を隠蔽する、または真実を告げるエピソードについて明らかな文化差が見られた。カナダの人々は、自らの行った向社会的行動を正直に告白することは良いことであると評価したが、中国の人々はカナダの人々と比べてよりネガティブな評価を下した。また向社会的行動を「うそ」をついて隠すことに対して、カナダの人々は一貫してネガティブな評価をしていたが、対照的に中国の人々はその行為をよりポジティブに評価していることが示された。そしてこのような評価の差異は児童期において顕在化することが明らかにされた。カナダの子ども達は、成人と同様に向社会的行動に対する「うそ」の叙述をよりネガティブに、真実の叙述をよりポジティブに評価していた。中国の子ども達は、児童前期の段階においては向社会的行動についての「うそ」と真実に対する道徳的評価はカナダの大人や子ども達の評価と類似しているが、発達とともに評価基準が変化し、児童後期においては中国の成人と同様の道徳的評価をすることが示された。Leeら(Lee, Cameron, Xu, Fu & Board, 1997; Lee, Xu, Fu, Cameron & Chen, 2001)はこの中国の人々において見られた自己の向社会的行動に対する「うそ」と真実に対する評価の特徴を謙遜効果(modesty effect)と名づけ、控えめで功名を自分で表さないことが美德とされる中国の伝統的な儒教の思想がこの現象の背景にある可能性を指摘し、さらに子どもがその文化によって社会化されるのは児童期を通してであることを主張している。

3. 子どもの「うそ」の概念

「うそ」に対する子どもの概念理解・定義判断に関する研究は、道徳判断と同様に1980代にはいつから検討されるようになった。特に90年代に入ってから、子どもの法廷証言や供述の信頼性に対する関心もあって様々な研究がなされてきている。本節では、道徳判断と同様に Piaget (1932) の報告の追試的研究と定義判断について新たなアプローチである典型アプローチを取り上げる。

1) 語彙的实在論の検討

Piaget (1932) は子どもの「うそ」の概念、定義判断の研究において、発達の初期の段階では事実と異なる誤った叙述を「うそ」と同定すると主張した。その後の研究においてもその主張を支持する結果が多く得られている (Peterson, Peterson & Seeto, 1983; Strichartz & Burton, 1990; Wimmer, Gruber & Perner, 1984)。例えば Wimmer, Gruber & Perner (1984) は、子どもの「うそ」の定義判断について意図理解との関係を詳細に検討し、道徳判断においては4歳半児でも意図に基づいた評価判断が可能なのに対し、定義判断において意図が基準となるのは8歳を過ぎてからであると報告した。このように、話し手の心的状態に関わらず、事実と異なる誤った叙述を「うそ」とラベル付けする子どもの特徴を Wimmer ら (1984) は道徳的实在論を真似て語彙的实在論 (lexical realism) と名付けている。

しかしながら90年代の後半に入り、幼児を始めとする年少児は事実と異なる誤った叙述を「うそ」と考える語彙的实在論に囚われているとは限らないとする研究が見られるようになってきている。例えば、Peterson (1995) はエピソード課題の登場人物に対する被験者側の意図の主観的知覚 (登場人物が持っている意図を被験者がどう認識しているか) との関連から研究を行った。その結果、5, 6歳児においても登場人物が他者を騙そうとする意図を持っていると判断した場合にその人物の叙述を「うそ」とラベル付けすることが可能であることが明らかにされた。

また Siegal ら (Gilli, Marchetti, Siegal & Peterson, 2001; Siegal & Peterson, 1996; Siegal & Peterson, 1998) はこれまでの「「うそ」, それとも「うそ」ではない」という質問形式は、「うそ」という言葉が強すぎる影響力を持っているため、エピソードの登場人物が実は「うそ」をついていると実験者が暗にほめかしてしまい、「うそ」という選択肢に子ども達を誘導してしまっている可能性がある」と主張した。また誤った叙述を「うそ」ではなく

間違いと同定しても、それを「「うそ」ではない」という選択肢に対応させることができるかどうかは明らかでないという問題点を指摘した。そこで、彼らは従来の質問形式の代わりに「これは「うそ」, それとも間違い」という質問形式を新たに設定し、「うそ」以外の誤った叙述の存在の可能性の明示化を行った。また誤った叙述が生じる場面として生物として非常に身近な領域である食物とその汚染に関する文脈 (かびていると知っている, あるいは知らないパンを他者に食べることができる伝えるというエピソード) を用い、幼児を対象に語彙的实在論についての再検討を行った。すると、従来の質問形式を使用した実験においては3歳児のほとんどが誤った叙述を全て「うそ」とみなす語彙的实在論的な判断を示した。一方、間違いという選択肢を明示化した条件においては、3歳児においても半数以上の者が「うそ」と間違いを正しく同定することが可能であった。また、彼らは誤った叙述をする場面が判断に与える影響についても検討しており、食物とそれに対する危険についての誤った叙述の場面のほうが、危険の伴わない食物についての誤った叙述や、食物と関連しない危険に対する誤った叙述の場面よりも、幼児の「うそ」と間違いの同定をより促進していたことを明らかにした。

2) 典型アプローチ

Piaget (1932) を始めとする「うそ」の定義判断についての初期の研究は、前述した「「うそ」か、「うそ」ではないか」と尋ねることで子ども達がどのように「うそ」を定義しているのかを検討した。このような事実と異なる誤った叙述を「「うそ」か、「うそ」ではないか」のいずれかに明確に分類できると考え、「うそ」のカテゴリーについて研究する理論的アプローチを命題的アプローチといい (Lee & Ross, 1997), Piaget (1932) 以降の研究においてもこのアプローチに基づいた研究が行われてきた。前述した Siegal ら (Gilli, Marchetti, Siegal & Peterson, 2001; Siegal & Peterson, 1996; Siegal & Peterson, 1998) の研究も「うそ」と間違いのいずれかに叙述が同定できることを前提としているため、命題的アプローチに基づく研究であると言える。研究結果の大きな枠においては、発達とともに人は「うそ」とそれ以外の誤った叙述を区別できるようになることが明らかになっている。しかしながら、いくつかの研究結果においては大人になっても「「うそ」, 「うそ」ではない」の2分類による「うそ」のカテゴリライズに失敗する者が少なからずいることが示されている。例えば、Peterson ら (1983) は、道徳判断と同様に10の事例に対する定

義判断についても命題的アプローチによる検討を幼児から大学生を対象に行った。彼らの研究では、意図的に誤った「うそ」の叙述については大学生は高い率で「うそ」と同定することができたが、一方で誇張や誤った方向推論といった無意図的に誤った叙述に対しても「うそ」であるとラベル付けする者が少なからずいることが明らかにされており、大人になっても「うそ」とそれ以外の誤った叙述を明確に分類していない場合があることが指摘された。

このような現象について、叙述を「うそ」か、「うそ」ではないか」の2つに明確に分類できると仮定する命題的アプローチでは捉えきれない問題があるのでないかと推測した一部の研究者が、「うそ」の定義判断についての新たなアプローチとして取り上げたのが典型アプローチである (Lee & Ross, 1997)。このアプローチは、概念理解についての研究において主張されている典型理論を「うそ」の定義判断に応用したものである。このアプローチにおいては「典型的な「うそ」 (prototypical lie telling)」というものが想定されており、ある叙述が典型的な「うそ」により近い特徴を持っていれば、その叙述はより「うそ」として判断され、逆にその特徴をあまり持っていない場合は「うそ」として判断されにくくなると考えられている。典型アプローチの大きな利点は、「うそ」の定義判断について「「うそ」か、「うそ」ではないか」で分類しにくい曖昧なもの、境界ケースの存在の説明を可能にしている点である。また、「うそ」という誤った叙述を規定するいくつかの特徴を分けて考えることができるため、それぞれの特徴が「うそ」の定義判断においてどの程度の影響力を持つのかを検討することが可能となる点が挙げられる。

この典型アプローチによる「うそ」の定義判断について最初に検討したのは Coleman & Kay (1981) である。彼らは「典型的な「うそ」」の特徴として (a) 叙述内容—叙述は誤りである (事実と異なる)、(b) 信念—話し手は叙述が誤りであると信じている、(c) 意図—叙述をする際に、話し手は聞き手を騙そうとしている、の3つを設定し、主に大学生を対象にこの3つの特徴の有無が、どのように「うそ」の定義判断に影響しているのかを検討した。3つの特徴の組み合わせから計8つのエピソードを設定し、そのエピソードにおける叙述をどの程度「うそ」であるかを評定させたところ、一部を除いてはこれらの特徴をより含んでいるエピソードでの叙述をより「うそ」であると考えていることが判った。また、この3つの特徴のうちどの特徴が「うそ」の定義判断においてより重要視されている

かについて比較検討したところ、信念が最も重要視されており、次いで意図、叙述内容の真実性は一番重要性が低いと認識されていることが示された。

Coleman & Kay (1981) の研究は、主に大人を対象にしたものであったが、この研究をベースに発達の視点を組み込んだのが Strichartz & Burton (1990a, 1990b Burton & Strichartz, 1992より引用) である。彼らは幼児から大学生を対象とした2つの調査を行っている。彼らは Coleman ら (1981) と同様に3つの特徴を元にした8種類のエピソードを作成し、それぞれのエピソードについてどの程度の被験者がその叙述を「うそ」、真実あるいはそれ以外にラベル付けするか (1990a)、あるいはそれぞれのエピソードにおける叙述をどの程度「うそ」だと思うか (1990b) を検討した。その結果、叙述について「うそ」および真実の定義判断をする際に重視する特徴が年齢によって異なるということが明らかになった。幼児から児童前期においては「うそ」のカテゴリーの判断基準は叙述内容、すなわち叙述の真実性であり、Piaget (1932) の報告と同様に発達の初期においては事実と異なる誤った叙述をその意図や信念に関係無しに「うそ」とラベル付けしていた。10歳前後からは叙述内容だけでなく、登場人物の信念についても判断基準にするようになるが、まだ叙述内容の方が基準の重要性が高く、大学生になって初めて信念が「うそ」の判断基準において最も重要な特徴になることが明らかにされた。また Piaget (1932) やその後の研究において重要視されていた意図については「うそ」の判断基準にほとんど影響を与えていないと指摘した。Strichartz & Burton (1990a) は、先行研究においては「うそ」の話し手の意図と信念が分離されておらず、まとめて意図として扱われていたため、意図が過大評価された結果が見出されたのではないかと報告している。これに対し、このような結果は意図の過大評価を明らかにするものではなく、エピソード課題の不自然な内容のせいであり、研究者が想定した登場人物の意図のと、被験者が認識した意図が食い違っているためであると反証する研究も現れている (Peterson, 1995)。

典型アプローチによる「うそ」の定義判断は、信念や叙述内容といった認知的な要素だけでなく、その叙述がどういった場面でなされたかという社会的文脈の関係について検討している研究も存在する。Lee & Ross (1997) は、Sweetser (1987) の「うそ」の社会言語学的モデルを元に社会的場面と動機が定義判断に与える影響を検討している。彼らは、場面として情報呈示場面 (正しい情報を伝えること

を求められる場面)と儀礼場面(ポジティブな社会的関係の維持が求められる場面)の2つを設けた。また動機として相手を援助しようとするものと相手を傷つけようとするものの2種類を設定し、主に青年を対象に叙述がどの程度「うそ」かを尋ねた。すると、儀礼場面よりも情報提示場面での「うそ」がより「うそ」であると評価され、また相手を傷つけることを目的とした「うそ」の方が援助を目的とした「うそ」よりもより「うそ」であると判断していることが示され、社会的文脈が「うそ」の程度の判断に影響していることを明らかにした。

Siegal ら (Gilli, Marchetti, Siegal & Peterson, 2001; Siegal & Peterson, 1996; Siegal & Peterson, 1998) は、幼児においても話し手の心的状態に基づいた「うそ」の定義判断が現れると報告している。一方で Strchartz & Burton (1990a, 1990b) は大人においても叙述の真実性という外的な要因が定義判断に影響していることを指摘している。これらの結果は一見矛盾するように見られるが、Lee (2000) はむしろ、「うそ」の定義判断の漸進的な発達を異なる視点から捉えている結果ではないかと主張している。ある特定の場面において子ども達は「うそ」と間違いを非常に早い段階から識別することが可能となるが、様々な場面で様々なタイプの誤った叙述と識別するにはさらに発達の過程を経る必要があり、そして叙述内容から話し手の心的状態へと判断基準が質的に変化するのでなくどちらの特徴も判断の材料として使用されることを表わしているのではないかと解釈をしている。

4. その他の「うそ」の認識に関する研究

「うそ」のついでの子どもの認識研究で扱われているものは、前述した道徳判断や定義判断が大部分を占める。しかしながらそれ以外の「うそ」の認識の側面について検討した研究も、少なからず存在する。本節ではそれらの研究について取り上げる。

1) 「うそ」の経験, 「うそ」の常悪性, 「うそ」のもたらす結果

Peterson ら (1983) は、道徳判断、定義判断と同時に「うそ」の経験(「うそ」をついたことがあるか否か)、「うそ」の常悪性(「うそ」は常に悪いか否か)、「うそ」のもたらす結果(「うそ」をつくるとどのような結果が生じるのか)について主に児童を対象に調査を行っている。子ども達の反応をまとめると、①「うそ」をついたことが無いと答える子どもは加齢とともに減少し、11歳の段階で0%になった。②「うそ」を常に悪いと判断することとは、5

歳児で90%以上、9歳児でも80%近く存在するが、11歳児においては大きく減少し30%未満になった。③「うそ」のもたらす結果については大きく4つのカテゴリー(外的権威による罰、罪悪感、信頼関係の崩壊、分からない)に回答を分類して検討したところ、加齢とともに外的な権威によって罰せられると答えるものが減少し、逆に信頼関係の崩壊を言及したものが増加した。これらの結果の一部は、Piaget (1932) によって報告された知見を支持するものであった。

2) 自己評価反応

子どもの「うそ」の認識として扱われてきたものは、Piaget (1932) の子どもの道徳的認知研究より出てきたものであるが、それ以外の研究の文脈から注目されたものとして自己評価反応があげられる。自己評価反応は Bandura (1986 明田, 1992より引用) の社会的認知理論の中心的概念の一つである。Bandura (1986) は人の道徳的行動を調整するものの一つとしてその行動の個人的な情緒的評価、すなわち自己評価反応を取り上げている。自分が行った行動が自らの価値観に照らし合わせてポジティブに評価される場合は、人は誇りや自己肯定感といったポジティブな感情を生起させる。一方、自分の行ったことがネガティブに評価すると罪悪感や不安感と言ったネガティブな感情が生じる。これらの感情がそれを引き起こす行動を自己強化し、ポジティブな気持ちになる行動をより多く行い、不快な感情を引き起こす行動を行うことを抑制すると Bandura (1986) は主張している。

この自己評価反応を「うそ」の認識に取り込んだのは Bussey (1992, 1999) である。Bussey (1992) は「うそ」と真実の叙述に対する評価反応を測定するために4つの感情(不安、罪悪感、心地よさ、誇り)についての評価反応尺度を設定し、「主人公は「うそ」をついたとき(本当のことを言ったとき)にどんな気持ちになったか?」と質問してそれぞれの評価感情の程度を測定した。4つの評価感情はその特性から自己承認をもたらすポジティブ評価反応と自己否認を導くネガティブ評価反応にまとめられ、それぞれの反応ごとに分析された。その結果、児童においては真実を告げるときに明らかに誇りや快な感情といったポジティブな評価反応は増加するが、幼児においては見られなかった。一方、ネガティブ評価反応については、全ての子ども達が真実を告げるよりも「うそ」をつくときにより不快な感情を感じるだろうと評価していた。

また Bussey (1999) は、道徳判断と同時に3つの「うそ」のタイプに対する子ども達の自己評価反

応を検討している。反社会的な「うそ」やジョーク的な「うそ」はよりネガティブな感情を引き起こし、同じ文脈での真実の叙述は逆にポジティブな感情をより引き起こすと子ども達は評価していた。しかしながら対人関係場面における儀礼的な「うそ」と真実の叙述においては評価感情の判断の間に大きな違いは見られないことを報告している。

3) 「うそ」の話し手の評価

Barnett, Bartel, Burns, Sanborn, Christensen & White (2000) は、「うそ」の叙述に対する評価ではなく、「うそ」をついた人物をどう評価するのか、という視点で研究を行っている。彼らは、児童後期の子ども達と大学生を対象に「うそ」の動機（自分のため－自己志向，他人のため－他者志向）と「うそ」によって得られる利益の内容（物理的なもの，心理的なもの）を統制したエピソードを提示し、主人公をどう評価するか（例えば、好ましいと思うかや罰せられるべきだと思うかなど）を調査した。被験者は、他者志向の動機で「うそ」をついた者よりも自己志向の動機で「うそ」をついた者をよりネガティブに評価しており、特に「うそ」をつくことで物理的な利益を得る主人公をよりネガティブに評価した。逆に、他者に物理的な利益を与えるために「うそ」をつく者に対しては、快い気持ちのみを与える「うそ」をついた者よりもよりポジティブに評価がなされた。加えて子ども達と大学生の間にも認識に差があり、子ども達は一貫して大学生よりも「うそ」をついた主人公をより厳しく評価していた。

5. まとめと今後の課題

「うそ」に対する子どもの認識についての研究は、Piaget (1932) を土台にしており、彼の研究の追試・再検討から成り立っているといっても過言ではない。それらの研究を大枠で捉えるならば、Piaget (1932) の主張より早期の段階である幼児期においても子どもは話し手の意図に基づいた「うそ」の道德判断や定義判断が現れることが明らかになった。また、一方で特に定義判断においては大人になっても叙述の内容が判断において重要な基準になっているといった新たな知見も得られている。しかしながら、この領域の研究は近年注目されているとはいえ、絶対数が少ないという問題点を抱えている。また、どのくらい早い段階で意図に基づいた「うそ」の道德判断、定義判断が可能かということが研究の中心となり、その他の要因が比較的軽視されてきた。ごく最近になって、これらの反省から新たな研究が行われ始めているのが現状であるといえる。最

後に、子どもの「うそ」の認識を扱う研究の今後の課題をいくつか述べたいと思う。

これまでの研究においては、主に意図の要因と結果の要因の2つが「うそ」の認識に与える影響について取り上げられてきた。しかしながらこれらの研究において、興味を中心となったのは意図の理解と道德判断、定義判断に関してであり、結果の諸要因についての詳細な検討はあまりなされてこなかったように思われる。また意図の要因についても「うそ」をつこうとしているか否かといったものの以外の側面があるのではないかと指摘する研究者も存在する。例えば、Peterson (1991) は、「うそ」を規定する要因として意図次元と結果次元の大きな2次元があり、それぞれに3つの下位次元があると主張している。意図次元による下位次元は、1) 故意性－騙すことを意図しているか否か、2) 動機－意図は利己的なものか否か、3) 結果の意図性（予見性）－「うそ」によって引き起こされる結果をあらかじめ予測しているか否か、の3つである。また結果次元の下位次元として1) 真実性－叙述内容の正しさ、2) 信用性－叙述が信じられたか否か、3) 実質的結果－叙述の結果に生じる利益や損害、の3つをPeterson (1991) は挙げている。この6つの次元とこれまでの研究を対応させると、意図次元においてはこれまでの研究において検討されているものはほとんどが故意性であり、動機についても一部検討している研究も存在する（例えばLee & Ross, 1997; Peterson ら, 1983など）が、まだ十分とは言えない状態であると言える。また結果次元の諸要因については、これまでの研究においてある程度の取り扱われてはいるが体系的に検討されてはならず、「うそ」の認識に与える影響についての結論が得られていないものが多い（例えば信用性におけるPiaget (1932) と Peterson ら (1983), Bussey (1992) など）。さらに意図と結果の諸要因の組み合わせがどのように認識に影響を及ぼすのか、あるいは及ぼさないのかを詳細に検討した研究もあまり見られないように思われる。これまでの「うそ」の認識研究の中心であった意図と結果の2つの大きな要因についてもまだ多くの研究の余地を残しているのが現状であり、さらなる検討が必要になると考えられる。

また、こういった場面で「うそ」の叙述がなされたのか、といった社会的場面の要因が「うそ」の認識に与える影響の検討が今後の課題の1つである。これらは1990年代になって研究が発表されるようになり、今後さらなる研究が期待されている領域であると言える。現在の段階ではBussey (1999) や

Lee & Ross (1997) のように異なる状況場面における「うそ」に対する認識の比較が主になされているが、今後は「うそ」の場面を構成する諸要因が「うそ」の認識にどのように関連するかの検討も必要となるだろう。例えば、Walper & Valtin (1992) は、儀礼的な「うそ」に対象を限定し対人関係の要因が道徳判断に与える影響を明らかにし、同じ儀礼的な「うそ」であっても対人関係によって評価が異なることを報告している。文脈間の比較だけでなく文脈内の諸要因の検討をすることで、より複雑な「うそ」の認識の過程を明らかにすることが可能になると思われる。

さらに、Burton & Strichartz (1992) や Lee (2000) が指摘するように、社会的な要因と意図や結果などの要因がどのように関連しあっているのかを検討することも重要であると思われる。山岸 (1991) は道徳判断の発達による変化を結果判断から意図判断という流れではなく、その状況に存在する多くの情報を理解し、それらの情報を場面に合わせて重み付けをして評価することができるようになる過程であると主張している。どのような社会的場面が意図や結果の要因の情報の重要性に変化を与え、道徳判断や定義判断で始めとする「うそ」に対する子どもの認識に影響を与えるのかを明らかにすることは、これまでの意図、故意性による評価、判断にのみ焦点化していた研究では得られなかった新たな知見を得るために必要であると考えられる。

引用文献

- 明田芳久 1992 社会的認知理論－バンデューラ 日本道徳性心理学研究会（編著）道徳性心理学 道徳教育のための心理学 北大路書房 P. 219-235.
- Barnett, M.A., Bartel, J.S., Burns, S.R., Sanborn, F.W., Christensen, N.E. & White, M.M. 2000 Perception of children who lied: Influence of lie motive and benefit. *Journal of Genetic Psychology*, 161, 381-383.
- Burton, R.V. & Strichartz, A.F. 1991 Children on the stand: The obligation to speak the truth. *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*, 12, 121-128.
- Burton, R.V. & Strichartz, A.F. 1992 Liar! liar! pants afire! In Ceci, S.J., Leichtman, M.D. & Putnick, M. (Ed) *Cognitive and Social Factors in Early Deception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associate. Pp11-28.
- Bussey, K. 1992 Lying and truthfulness: Children's definitions, standards, and evaluative reactions. *Child Development*, 63, 129-137.
- Bussey, K. 1999 Children's categorization and evaluation of different types of lies and truths. *Child Development*, 70, 1338-1347.
- Coleman, L. & Kay, P. 1981 Prototype semantics: The English word lie. *Language*, 57, 26-44.
- Corson, D. 1984 Lying and killing: Language and moral reasoning of twelve and fifteen-years olds by social group. *Adolescence*, 74, 473-482.
- Fu, G., Lee, K., Cameron, C.A. & Xu, F. 2001 Chinese and Canadian adult's categorization and evaluation of lie and truth telling about prosocial and antisocial behaviors. *Journal of Cross cultural Psychology*, 32, 720-727.
- Gilli, G., Marchetti, A., Siegal, M. & Peterson, C.C. 2001 Children's incipient ability to distinguish mistakes from lies: An Italian investigation. *International Journal of Behavioral Development*, 25, 88-92.
- Gutkin, D.C. 1972 The effect of systematic story changes on intentionality in children's moral judgements. *Child Development*, 43, 187-195.
- Hall, G.S. 1891 Children's lies. *Pedagogical Seminary*, 1, 211-218.
- Lee, K., Cameron, C.A., Xu, F., Fu, G. & Board, J. 1997 Chinese and Canadian children's evaluation of lying and truth telling: Similarities and differences in the context of pro- and antisocial behavior. *Child Development*, 68, 924-934.
- Lee, K. & Ross, H.J. 1997 The concept of lying in adolescents and young adults: Testing Sweetser's folkloristic model. *Merrill-Palmer Quarterly*, 43, 255-270.
- Lee, K. 2000 Lying as doing deceptive things with words: A speech act theoretical perspective. In J.W. Astington (Ed.) *Minds in the making*. Oxford: Blackwell. Pp177-196.
- Lee, K., Xu, F., Fu, G., Cameron, C.A. & Chen, S. 2001 Taiwan and Mainland Chinese and Canadian children's categorization and evaluation of lie and truth telling: A modesty effect. *British Journal of Developmental Psychology*, 19, 525-542.
- McKechie, R.J. 1971 Between Piaget's stages: A study in moral development. *British Journal of Educational Psychology*, 41, 213-217.
- 内藤俊史 1992 認知的発達理論－コールバー

- グ ハード面の発達理論 日本道徳性心理学会 (編著) 道徳性心理学 道徳教育のための心理学 北大路書房 P. 47-59.
- 二宮克美 1982 児童の道徳的判断の発達に関する一研究: Gutkin の 4 段階説の発達同時性の検討 教育心理学研究, 30, 18-22.
- Peisach, E. & Hardeman, M. 1983 Moral reasoning in early childhood: Lying and stealing. *Journal of Genetic Psychology*, 142, 107-120.
- Peterson, C.C., Peterson, J.M. & Seeto, D. 1983 Developmental changes in ideas about lying. *Child Development*, 54, 1529-1535.
- Peterson, C.C. 1991 What is lie? Children's use of intentions and consequences in lexical definitions and moral evaluation of lying. Rotenberg, K. (Ed) *Children's Interpersonal Trust: Sensitivity to lying, deception, and promise violations*, New York: Springer-Verlag. Pp5-19.
- Peterson, C.C. 1995 The role of perceived intention to deceive in children's and adult's concept of lying. *British Journal of Developmental Psychology*, 13, 237-260.
- ピアジェ J. 大伴茂 (訳) 1957 ピアジェ児童臨床心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達 同文書院. (Piaget, J. 1932 *Le Judgement moral chez l'enfant*. Geneve: Institut J.J. Rousseau.)
- Siegal, M. & Peterson, C.C. 1996 Breaking the mold: A fresh look at children's understanding of questions about lies and mistakes. *Developmental Psychology*, 32, 322-334.
- Siegal, M. & Peterson, C.C. 1998 Preschooler's understanding of lies and innocent and negligent mistakes. *Developmental Psychology*, 34, 332-341.
- Stern, C. & Stern, W. translated by Lamiell, J.T. 1999 *Recollection, Testimony, and lying in early childhood*. Washington, DC: American Psychological Association. (Stern, C. und Stern, W. 1909 *Erinnerung, Aussage und Lüge: in der ersten Kindheit*. Leipzig: J.A. Barth.)
- Strichartz, A.F. & Burton, R.V. 1990 Lies and truth: A study of the development of the concept. *Child Development*, 61, 211-220.
- Sweetser, E.E. 1987 The definition of lie: An examination of the folk models underlying a semantic prototype. In D. Holland (Ed.), *Cultural models in language and thought*. New York: Cambridge University Press. Pp43-66.
- Talwar, V. & Lee, K. 2002 Development of lying to conceal a transgression: Children's control of expressive behavior during verbal deception. *International Journal of Behavioral Development*, 26, 436-444.
- Walper, S & Valtin, R 1992 Children's understanding of white lies. In W.Winter (Series Ed.) & R.J. Watts, S. Ide, & K. Ehlich (Vol. Eds.), *Trends in Linguistics: Studies and Monographs*, 59. *Politeness in Language: Studies in its history, theory and practice*. New York: Mouton. Pp231-251.
- Wimmer, H., Gruber, S. & Perner, J. 1984 Young children's conception of lying: Lexical realism-moral subjectivism. *Journal of Experimental Child Psychology*, 37, 1-30.
- Wimmer, H. & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 山岸明子 1991 道徳的認知の発達 大西文行 (編) 新・児童心理学講座 9 道徳性と規範意識の発達 金子書房 P. 51-93.
- 吉沢昌紀 1992 認知的発達理論ーピアジェ 日本道徳性心理学会 (編著) 道徳性心理学 道徳教育のための心理学 北大路書房 P. 29-46.

(受稿 4 月 14 日: 受理 5 月 19 日)